

手記

シベリア抑留記

新潟県 柴 澤 正 雄

私は大正九年八月二十七日、父久三郎、母トミの二男として、北海道函館市に生まれる。両親は新潟市の出身であるが、父の仕事の関係上、兄は新潟市、弟は横浜市、妹たちはまた新潟市と、それぞれ生まれた土地が違う。新潟市には昭和の初期に帰り、現在に至る。私は新潟市立万代小学校を経て、昭和十年三月二十六日、新潟市立長嶺高等小学校を卒業して、社会人としての第一歩を踏み出す。当時、新潟新聞社・毎日新聞社と二社あり、私の従兄の平井仁八氏が新潟新聞社

の編集部におり、私も新聞記者にあこがれ、従兄が勤務する新潟新聞社に入社する。籍は編集部にありながら、仕事は原稿集め、お茶出し、使い走りと予想もしていない仕事ばかり、苦勞をしながらある程度の編集の仕事ができるようになったが、事情あってあこがれの記者希望を断念、堅い国鉄に入社することに決定する。その当時、国鉄に入社したい希望者が多数のため、勉強を余儀なくされ、連日のごとく図書館へ。

昭和十三年、念願の国鉄の入社試験に合格する。昭和十三年九月六日、新潟鉄道管理局経理部沼垂用品庫雑務手として採用され国鉄生活の第一歩を歩み始めた。雑務手を拝命して一番びっくりしたことは、傭人と雇員の勤務状態が余りにも差のあることでした。傭人の勤務時間は出勤が一時間早く、退社も一時間遅

く、その上制服制帽まで違っていました。入社してまず私の第一目標として、一日も早く雇員になることに心に誓いました。昭和十六年九月三十日、雇員試験に合格する。

昭和十七年三月三十一日付で経理部用品課勤務を拝命する。念願の事務職となる。私は昭和十五年の徴兵検査で第三乙種合格となる。昔の丙種である。常に先輩から、君に召集令状がくれば日本は終わりと言われながら、ついに昭和十九年二月十一日（旧紀元節）に召集令状をもらいました。兄は現役を除隊後すぐ、昭和十六年十二月八日召集を受け、新発田連隊に入営。

弟は結核のため病床と心残りがありましたが、幸い妹二人が元気であり、家族はじめ親戚と近所の皆さんに送られ、昭和十九年二月十九日、東部二十五部隊、仙台第二師団騎兵隊第二連隊に入隊する。二、三日の出動準備に追われ、寒い早朝仙台駅より列車に乗車する。行く先は一切不明、列車の窓はよろい戸が下ろされ、暗く、外は見えず、列車は一路走り続ける。到着したところが青森駅。早速、青函連絡船に乗船する。そし

て津軽海峡を渡る。海峡はすでに米軍の潜水艦が出没して、常に身の危険があった。

無事、吹雪の函館港に到着する。早速上陸し、列車で一路小樽市に向かう。昭和十九年二月の下旬ごろ、小樽に到着する。小樽で民泊。戦友の宮城県塩釜市の斎藤喜一氏と二人で、小樽市緑町の後藤さん宅でお世話になることとなる。後藤さんは新潟の出身で、娘さんが国鉄の小樽駅の改札掛に勤務されており、すっかり話が合い、後藤さんは戦線に赴く私たちを親身のごとく歓待され、楽しい日々を過ごせたことが何よりの救いであった。

私たちは師団直轄の防疫給水班となり、各連隊及び部隊に配属となる。小樽に在住中は連日連夜輸送船への物資等の積み込み作業であった。積み込み完了後いよいよ駆逐艦二隻に護衛されて輸送船良洋丸に乗船。堂々と船団が中千島諸島の守備隊員として出航する。

だが、輸送船は敵米軍の潜水艦に次々と沈められた。幸い私たちの良洋丸は目的地松輪島に着いた。波浪のため船は暗礁に乗り上げ沈没寸前であったが、岩礁

が浅く辛うじて沈没は免れ、昭和十九年三月十日「陸軍記念日」に吹雪の荒れ狂う中、待望の松輪島へ小舟に乗り移り、直接上陸する。なお、一部の隊は磐城島に上陸した戦友もいる。

上陸するや早速飛行場に行き、糧秣及び毛布などの積み込み作業をする。また座礁した良洋丸からの揚陸作業が連日続けられた。松輪島は周囲約二十キロ、長さ十二キロ、幅最大六キロの小島であり、しかも無人の島で養狐の島でもあった。雪は天から降るものと思っていたが、横なぐり、目も開けられないほど。また冬が去れば濃霧との闘い。敵米軍はその合間を縫うかのように連日連夜の空襲と艦砲射撃。初めての軍隊生活の私にはすべてが初めての体験でした。

雪に穴を掘り、その中に身を伏せ、震えながら艦砲射撃の終わるのを祈りながら待つており、砲弾を身近に受けて、暗い闇夜の爆発音にどぎもを抜かれる。夜が明けて穴の周囲を見ると、厚い破片が至る所、雪に刺さっており、今更ながら身の震えが止まらない。私たち防疫給水班の任務は防疫と給水です。衛生班は防

疫上の仕事、私たちは給水の任務と陣地横穴退避壕構築のための資材運搬、横穴の構築等の土方作業と厳しい日課の連続でした。

給水班の私たちは各部隊への飲料水及び炊事用水の供給が主で、水は人間生活には絶対に必要なもので、給水先の各部隊には大変喜ばれ、それは想像以上のものがあつた。

また、島のシンボルでもある芙蓉山は一、四八五メートルの高さ、木も緑もない。火山灰の山で常時頂上には白煙を上げ、不気味な山である。その山に駐屯する部隊への給水作業。ドラム缶を背負い、二、三名の戦友がドラム缶にロープを巻いて引き上げる。また他の戦友は携帯用の給水袋に水を詰めて背負い、約五十度の急斜面を汗とほこりにまみれ頂上目指して一步一步と前進する。やっと頂上に着いて不可能に近い任務を果たした瞬間の優越感、それは生涯忘れることができない。頂上に到着して、水を待ち駐屯する戦友たちの笑顔を見ると、あの苦しい足跡が身にしみる。

帰山は晴天に恵まれ、千島列島の島々を眼下に見な

がら、そして吹き出す硫黄の臭いのする噴煙を横目に
見て戦友と無事に帰班したことを喜び合った。

敗戦が濃厚になると、米軍の艦隊が七、八隻、約十
日間ぐらい、肉眼で見えるほど近い島に接近停泊して
昼は休み、夜になると花火のような照明弾の合図によ
って艦砲射撃が何時間も続く。連日身の危険にさらさ
れながら横穴で終わりを待つ。その後米艦は南方に移
動したとのこと。私たち初年兵には、敵艦が常時出沒
するので後続の初年兵は来島せず、とうとう初年兵で
終わる。したがって毎日が苦しい軍隊生活、それは言
葉では表現できない。

昭和二十年八月十五日に待望の終戦を迎え、私たち
初年兵は戦友と手を取り合い、あの苦しい軍隊生活か
ら解放されると喜び合ったが、その後にあの苦しいシ
ベリアの捕虜生活が待っているとは夢にも思っていな
かった。

昭和二十年九月中旬ごろ、ソ連兵士が上陸して我々
は武装解除される。約半月後に日本に帰還と騙されて、
ソ連船に乘せられた。たどり着いたところが沿海州の

ソフガワニ港。持ち物は乾パン、タバコその他軍隊の
支給品少々と私物も若干、服装は防寒服に防寒具。港
に入港すると花火を上げ、ソ連人の男女によるダンス
などで我々捕虜を迎える。初めて見る外国人、珍しさ
と恐ろしさで異様さを感じた。

上陸後、早速、歩かされ捕虜収容所に夜到着する。
収容所の周りは二重の有刺鉄線が張り巡らされ、四隅
の高い見張台には常時ソ連兵士が自動小銃を持って監
視している。いよいよ明日から捕虜生活が始まると思
うと、胸深く刺し込むものがあつた。また我々の体験
しない重労働が待っていた。

まだ薄暗い収容所の中で作業整列の鐘が鳴る。正に
地獄の鐘であつた。人員の確認に長時間を要した。頭
の悪いソ連人、これでは冬が心配となる。シベリアの
冬は零下五〇度であつても作業がある。作業現場に行
く途中戦友の顔を見ると、鼻や耳が凍傷になっている
者もあり、お互いにこすりながら作業現場へ。作業は
鉄道工事、森林の伐採、台車による石の運搬、発破作
業など。

厳寒と空腹。しいられる重労働の毎日。体力的、精神的にも極度に低下した。作業現場にも自動小銃を持ったソ連兵士が常時監視しており、言葉が通じないため、小便に行くのに脱走者と誤解され銃殺された戦友も多くおつた。労働はすべてノルマで、遂行しなければ収容所に帰れない。収容所に帰れば室は暗く寒々しいありさま。また、夕食が終われば、日本人による社会主義の教育時に試験があり、不合格者名は収容所内の掲示板にはり出され、反動分子として吊るし上げられる。昼は重労働、夜は社会主義の勉強と。また、日本人は団結力が強い旧部隊の解体を目的のため、収容所もハバロフスク、コムソモリスクなど十五カ所も転々と移動され、その移動の途中に寒さと栄養失調のため死亡する戦友もあり、遺体は道路脇に捨てられる始末。彼らの常の行動は、私たちには考えられないことばかりでした。

私は昭和二十二年四月、まだ寒いシベリア、地名は収容所をあまりにも転々としたため記憶がない。森林の伐採中、タポールにより左膝を受傷する。それでも

作業を相手の北海道江差市出身の平田氏と続行しておりましたが、作業途中、はれがひどくなり熱も四〇度ぐらいとなり、ソ連側の命令により作業を中止して収容所に帰り、日本人の軍医により早速手術をしたが、傷が深いため化膿がひどく、ソ連の軍病院に入院してソ連の女性軍医により緊急に再手術をする。傷口が二カ所のため貫通銃創と同じ状態で約三カ月入院生活をする。なお、手術はすべて麻酔のない手術でした。病院の闘病生活中に毎日のように死亡者が続出。遺体は倉庫の中に山積みになされ、後に海に投げ捨てられたとのこと。退院後はオツペーカローナに収容された。

その収容所は、栄養失調になった戦友たちで作業をすることもできず、日本に移送される者ばかりで、私のような外傷患者は少ない。その収容所で軽作業が始まった。その収容所で、現在新潟市春日町在住の苅部クリーニングの店主に会い、懐かしさで暇を見ては語り合った。その苅部さんは栄養失調がひどく間もなく復員して、早速、私の両親に会い、受傷はしたが元気であるので安心してくれ、あの収容所は大半が内地

に帰される者だけなので柴澤君も近く復員するだろうと伝えたため、両親は首を長くして私の帰りを待っていたらしい。ところが私はまだ、その収容所で軽作業に従事していた。

作業内容は風呂の当番、収容所長の当番、また収容所の糧秣の受領など比較的軽作業で、内地への帰還を期待しながら約六カ月後、また強制収容所に連れていかれ、またあの過酷な重労働が始まる。やはり入院前以上の労働であつた。空腹のため、つくしや食べられる野草を飯ごうでゆでておにぎりにおき、翌朝作業現場に着くとまずそれを食べてから作業をする。ハラシヨラポータ（優良労働者）はすぐに日本に帰すと毎日言葉巧みにだまされて、とうとう四年六カ月の捕虜生活となる。

ある日、突然貨物列車に乗せられ、約十日間でやつと着いたところがナホトカ港。これでやつと日本に帰ることができると皆戦友と喜び合っていたが、そこで社会主義に共鳴しない者はまた残され貨車に乗せられ収容所へ。また重労働が待っている。ナホトカでは何

カ所もの収容所でいろいろと検査を受けて、約十日間ぐらいでやつと解放され帰還船に乗船した。まだ不安がある。その巧みにだますソ連のことであるから、舞鶴港に無事入港するまで安心ができなかった。船中は荒波による船酔いと社会主義の教育と、毎日が厳しい日々であつた。昭和二十四年の十月初旬ごろ、待望の舞鶴港に入港する。

早速上陸を開始する。舞鶴市民の熱狂的な歓迎を受ける。やつと戦友の皆にも明るい笑顔が見られる。舞鶴では大きい風呂に入り、青畳の上で赤飯をいただき、すばらしい待遇を受けてやつと人間らしくなったが、私を待っていたのは悲しい出来事であつた。戸籍が備えてある室で戸籍を見ると、兄は昭和二十年五月一日、終戦を目前にインパール作戦で戦死する。弟は昭和十九年十月二日、私が出征の年、結核で病死。妹二人もやはり結核で昭和二十年の八月と九月に病死する。両親は私の帰りを心待ちにしており、一年に三回も葬式を出した両親の胸中を思うと胸が痛んだ。

昭和二十四年で召集解除となり、舞鶴で支給された

金二千円をふところに、一路我が家に向かって列車は走る。

車中でもリーダーがおり、社会主義の教育とインターナショナルの歌を合唱しながら氣勢を上げる。新潟周辺の人は共産党に仮入党の手続をするよう新潟市の私に依頼されるが、父がそれをよく知っており、私のものを除いて届けた。復員後しばらく警察の尾行を受けた。家庭に入り、両親から苦勞された話を聞き、すっかり感動したが、あのソ連による長い抑留生活が憎かった。兄弟妹の分をも親孝行することを深く心に誓い、新しい人生に向かって出発した。

お陰様で入隊前の国鉄に復職する。機構改正で新潟支社経理部調度課予算担当として、新しい国鉄生活が始まった。

昭和二十五年十月、結婚して充実した生活に入る。

人生は皮肉なもので、あの戦時中苦勞した両親も、母は昭和三十九年一月四日、六十三歳の若さでガンのため病死、父も昭和四十三年九月二十三日彼岸の中、脳出血のため約一時間で七十四歳の一生を閉じた。親

孝行したい時に両親は他界する。そこで職場で頑張り、亡き両親にむくいることにした。

国鉄は試験制度で、入社、掛職、主任、助役、最後に上級幹部職に合格しなければ支社の係長及び駅長にも登用されない厳しい世界であった。

両親には早く別れたが三人の子供に恵まれ、孫も六人と家庭も幸せ。私も幸い、昭和四十年被服係長、昭和四十五年二月経理部調度課の企画予算係長を拝命、課長を補佐するトップ係長。ある日突然経理部長の呼び出しがあり、現場長に転出しないかとの言葉。私は支社生活ばかり、しかも仕事も資材、経理と、営業及び運転とは縁のない畑を歩いており、当惑したが、命令のため昭和四十六年二月、越後線の内野駅長を拝命する。駅舎の改築、合理化による貨物扱いの廃止等難問が山積み、それに組合対策があり、日夜苦勞の連続のため、駅舎改築の打ち合わせ中倒れ救急車で入院。病院生活一年で、支社の出先機関である直江津運輸長室の副長として二年。その二年が労働組合の闘争の激しい時で、毎日のように宿舎に帰れず、組合との闘い。

またシベリア生活が思い出される。最後に越後線巻駅長となり、無事任務を終えて昭和五十一年二月退職して、国鉄の関連会社の新潟鉄道用品運輸株式会社に入社した。

入社二年目役員となり、取締役輸送部長となる。それから新しく商事部をつくり十二年の会社生活に終わりを告げ、昭和六十三年六月、会社を退職した。

現在、国鉄OB会の幹事、戦友会、全抑協等、また老人クラブの副会長として暇のない毎日を有意義に過ごしており、また余暇を見て詩吟、囲碁をやり、家内と充実した生活をしております。

今、自分の人生を振り返ると、初年兵の苦しい軍隊生活と四年半のシベリアの抑留生活など、あの過酷な労働が時折よみがえってきます。

亡き戦友の冥福を心から祈ります。

シベリア強制抑留体験記

岐阜県 長 澤 秀 道

昭和二十年八月十五日、戦争が終わった。だけれども「さあ、国へ帰れる」と思っていた。だがこの思いに反して、これから過酷な運命が待っていた。私の人生の中で消すことのできない悪夢が始まった。シベリア強制抑留であった。

ところは北朝鮮、平壤新里の航空教育隊である。この隊舎はすぐ北側に陸軍飛行場、西に大同江を隔てて丘陵上に乙密台、玄武門（旧王宮）が望めるところにあった。

十八日、飛行場にソ連軍の軍使と一箇大隊ほどの部隊が着陸してきた。目的は、平壤に駐屯している部隊の武装解除をして、三合里（さんごうり）（陸軍演習場）へ集結させるためであった。

私は昭和十九年、文科系、教育系学生の繰り上げ卒